

ギルガメッシュ叙事詩

ギルガメッシュは古代の「シュメール王名表」でシュメール初期王朝時代のウルク第一王朝5代目の王(紀元前2600年ころ)。「ウルクの[]aを建設した」王として伝承。ウルクは現イラク南部サマーワの遺跡。都市神は女神イナンナ。「[]bもつ」が「広場ある」とともにウルクの形容詞。

初期の伝承は紀元前3千年紀末にシュメール語で成立し、のちにアッカド語、アッシリア語などに継承され「叙事詩」として完成した、と考えられる。

叙事詩はアッシリア帝国の首都ニネヴェで発見された2万数千点の粘土板から英人ジョージ・スミスが「大洪水」の話を発見、紹介して知られるようになった。全体は12板からなり、ギルガメッシュの冒険譚の最後に盟友エンキドゥの死により自ら死すべきものと悟り永遠の生命を求めて彷徨い、かつて都市シュルツパクの洪水を方舟を造り生き延びてそれを手に入れて神となったウトナピシュティム(命を見た者の意。シュメール版ではジウスドラ)を訪ね、彼がギルガメッシュに語るのがこの第11板「大洪水」物語である。

ギルガメッシュはウトナピシュティムに嘆願した。

「不死の生命をもつあなたの肢体は私と同様です。私の目はあなたに向かって注がれています。私の腕はあなたに向かって差し伸べられています。どうか話してください。あなたがいかにして神々の集いに立ち、不死の生命を探し当てたのかを」

彼の懇願に負けたウトナピシュティムは、口を開いた。

「隠された事柄をお前に明かそう、神々の秘密をお前に語ろう・・・お前も知っているシュルツパクの町は、ユーフラテスの河辺にある町。その歴史は古く、そこには神々が住んでいた。

が、偉大な神々は洪水を起こそうとした。そこにいたのは彼らの父アヌ(天神)、彼らの顧問官・英雄エンリル(地の男神)、彼らの式部官ニヌルタ(狩猟・戦闘の神)、彼らの運河監督官エンヌギ。ニンシクすなわちエア(水の男神)もそこにおり、彼らとともにいた。しかし、彼(エア神)は彼らの言葉を葦(あし)屋に向かって繰り返した。

葦屋よ、葦屋よ。壁よ、壁よ。葦屋よ、聞け、壁よ、悟れ。

シュルツパクの人、ウバラ・トウトウの子よ、家を打ち壊し、方舟を造れ。

持ち物を棄て、生命を求めよ。

生命あるもののあらゆる種を方舟に導き入れよ・・・

私は、エア神の仰せのとおり町に長老や職人を丸め込んで方舟(60メートル四方)を造らせた。

そしてすべての銀を、すべての金を、すべての生き物の種を方舟に積み込んだ。

最後にわが家族、わが親族、すべての技術者を乗せた。

シャマシュ神は言った。

「朝にはクック(パンの一種)を、夕には小麦を雨と降らせよう。さあ、方舟に入り、戸を閉じよ」

シャマシュ神(太陽の男神)はそのとおりにした。私はそれから方舟の戸を閉じた。

その時がやってきた。

暁が輝き始めたとき、天の基から黒雲が立ち上った。

アダド神(天候の男神)は雲の中から吼え、シャラト神とハニシュ神(ともに嵐の布告使)がその先駆けとなった。エラガル神(冥界の神)が方舟の留め柱を引き抜き、ニヌルタ神(戦いの神)が堰を切った。アヌンナキ(神々の集合)は松明を掲げ大地を燃やそうとした。

アダドの沈黙により全地が暗くなると、続く雄叫びで全地は壺のように破壊された。終日暴風が吹き荒れ、大洪水が大地を覆った。

戦争のように、人々の上に破滅が走った。彼らは互いに見分けもつかなかった。

神々も大洪水を恐れ、アヌ神の天に昇ってしまった。神々はうずくまった。

イシュタル(愛の女神)は絶叫し、嘆いた。

「いにしえの日は、粘土と化してしまったとは！私が神々の集いで禍事を口にしたからか！どうして禍事を口にしてしまったのか！

人間を滅ぼすために戦争を命じてしまったのか！私が生んだ、わが人間たちが、稚魚のように海面を満たす・・・」アヌンナキも彼女とともに泣いた。神々は嘆き、食物さえとらなかった。六日七夜、大洪水と暴風が大地を拭った。七日目、暴風と大洪水は戦いを終わらせた。大洋は静まり、悪風(イムフラ)は治まり、洪水は退いた。

光が地上に射した。

沈黙があたりを支配していた。

全人類は粘土に戻ってしまっていた。

私はそれを見て、泣いた。

あたりを見回すと、12ペール(1ペール=10.7km)のところに土地が見えた。

方舟はニムシュ(あるいはニツイル、ニシル=アッシリア北西の山?)の山に漂着し、止まった。

七日目になって、私は鳩を放した。鳩は飛んでいったが、戻ってきた。休み場所が見当たらなかったのだ。

私は燕を放した。燕は飛んでいったが、戻ってきた。休み場所が見当たらなかったのだ。

私は鳥を放した。鳥は飛んでゆき、水が退いたのを見てついでに、身繕いし、引き返してこなかった。

そこですべての鳥を四方に放ち、山の頂を前にして供儀をささげた。

その芳香を嗅ぎ、神々が集まった。

イシュタル女神が首飾りを掲げて言った。

「神々よ、私はこのラピスラズリを決して忘れない。これらの日々を心に留め、決して忘れない。神々よ供物に集え。だがエンリルは来てはならない。彼は熟慮なく大洪水を起こし、わが人間たちを破局に引き渡したからだ」

エンリル神は遅れて来たが、方舟を見ると怒って言った。

「何らかの生命が破局を逃れたのか。人間は生き延びてはならなかったのに」

ニヌルタ神が言った。

「エア以外に誰がこのようなことをするだろうか。エアはすべての業をわきまえている」

エア神がエンリルに言った。

「あなたは英雄、神々の賢者。どうして熟慮なく洪水をもたらしたのか。

罪人にはその罪を負わせよ、咎人にはその咎を負わせよ。それで赦せ、それで我慢せよ。彼とて抹消されてはならない。洪水をもたらす代わりに、ライオンを放ち、狼を起こし、飢饉を起こし、エラ(疫病の神)を起こして人間の数を減らせよよかったのだ。

私は偉大なる神々の秘密を明かしてはいない。

アトラ・ハシース(最高の賢者の意。ウトナピシュティムのこと)に夢を見させたら、彼が神々の秘密を聞いたのだ・・・」

エンリル神はエア神の言葉を聞くと、私とわが妻を引き上げ、祝福して言った。

「これまでウトナピシュティムは人間であったが、いまや彼とその妻はわれら神々のようになる。ウトナピシュティムはるか遠くの河口に住め」

神々は私を連れて行き、はるか遠くの河口に住ませたのだ。

二人は旅を続け、ウルクに到着した。

ギルガメッシュはウルシャナビ(道案内役)に言った。

「ウルシャナビよ、ウルクの[]aに上り、往来してみよ。礎石を調べ、煉瓦を吟味してみよ。その煉瓦が[]c煉瓦でないかどうか、その基礎は七賢者=太古のシュメール7都市に文明をもたらしたときとされる=が据えたのではなかったかどうか。」